

デカルト『情念論』での分析対象としての情念の位置付け

— § 22～§ 29に於ける諸感覚中での情念の分類付けを巡って—

黒岡浩一

序

デカルトは、『情念論』を「自然学者として « en physicien »」(AT, XI, p.362)¹⁾書いたと述べている。しかし、この作品は、デカルト道德の頂点とされる「高邁 « la générosité »」がその名をとって論じられる殆ど唯一の書でもある²⁾。G.Rodis-Lewis は、デカルト晩年の自由論の変遷についての考察の結論として、この「高邁」こそが『哲学の原理』(以下『原理』)の仏訳者への書簡での形而上学の実りたる「最高かつ最も完全な道德」であるとした³⁾。また、J.-L. Marion は、M. Henry による抽出した « cogito » 解釈から、「高邁」は « cogito ergo sum » の最終定式化であるとの見解に到った⁴⁾。『情念論』は、デカルト本人の言葉に反して、自然学即ち生理学の書として以上に、道德の書として、また形而上学を孕む書としてまでも、見做されている。

『情念論』では、「高邁」についての数項に到るまでもなく第I部から、主に自然学的な態度でなされる情念分析の中であるいはその背後で、生理学的要素、道德的要素、心理学的要素、形而上学的要素等が様々に絡み合っており、この作品でのそれらの諸要素間の関連・推移の構造は、作品の外観以上に、複雑である。それらの絡み合い、それらの推移・関連については、まだ、解明されるべきことが多く残されている。

それらの解明の試みの一つ——『情念論』では自然学的考察の中で如何に道德

1) デカルトの引用参照は、*(Œuvres de Descartes, éd. C. Adam & P. Tannery, nouvelle présentation par B. Rochot & P. Costabel, Vrin, Paris, 11vols., 1964-1974)* を AT と略記し巻数と頁数のみを記すが、綴り字等の都合上、引用テキストは、*(Œuvres philosophiques de Descartes, éd. F. Alquié, Garnier, Paris, 3vols., 1963-1973)* (参照する場合は FA と略記し巻数と頁数を記す) を用いた。但し、『情念論』本文からの引用参照は項数のみを略記する (例えば、第7項 = § 7)。尚、引用文中の []、傍点、イタリックは全て筆者による。

2) Alquié の指摘 (FA, III, p.619, note2) によれば、1645年10月6日付けエリザベト宛書簡に既に「高邁」の雛型となる考えが見られる。

3) G.Rodis-Lewis, "Le dernier Fruit de la Métaphysique cartésienne: la Générosité", in *les Etudes philosophiques*, n°1, 1987, Paris, pp.43-54.

4) J.-L.Marion, "Générosité et Phénoménologie: Remarques sur l'interprétation du cogito cartésien par Michel Henry, in *les Etudes philosophiques*, n°1, 1988, Paris, pp.51-72.

の問題への転換がなされているか——として、A. J. -L. Delamarre は、情念の定義たる § 27 までに見られるような考察を、「人間にとっての情念とは何か」という道徳的観点ではなく「人間に於ける情念とは何か」という自然学的観点からの人間の諸覚知 perceptions 中での「分類付けの論考」と見做し、後者の観点から前者への転換が、情念の効用が述べられる § 40 で、情念が魂に迫る「同意 « consentement »」の問題の提示によって、生じることを明らかにしている⁵⁾。本論での考察の対象は、自然学的な態度で情念の分類付けがなされるとされる『情念論』 § 22～§ 29⁶⁾ である。そこでは、諸感覚の中での情念の分類付け、情念の定義とその説明がなされる。本論の目的は、『情念論』の構造やその中の様々な情念分析等を探る前段階として、諸感覚中での情念の位置付けや情念の定義を考察することによって、デカルトが、情念についての様々な分析に取りかかる前に、分析対象たる情念をいかに捉えているかを明らかにすることである。先ず、『情念論』に於ける諸感覚中での情念の位置と『人間論』と『原理』に於ける情念分析でのその位置との相違を一瞥することから始める。

Ⅰ. 『人間論』『原理』の2項分類から『情念論』の3項分類へ

『人間論』では自動機械たる身体の見地から身体機構として、他方、『原理』では心身合一により生じる思惟の見地から感覚という覚知の一つとして、情念は、「外的感覚（五感）」と「内的感覚（情念と自然的欲求 *appétits naturels*）」との伝統的な2項分類の中の後者に分類され、他の諸感覚と並置して扱われている⁷⁾。この分類は、感覚に関わる身体器官が五感であるか身体内部の器官であるかを基準としている。

『情念論』では、「神経を介して魂に到来するすべての覚知 « toutes les perceptions qui viennent à l'âme par l'entremise des nerfs »」（§ 22）たる諸感覚は、外的対象・身体・魂のいずれに「関係付け « rapporter »」られるかとの基準から、3

5) "Du Consentement: Remarques sur *Les Passions de l'Âme*, § 40", in *La Passion de la Raison*, PUF, Paris, 1983, pp.131-144.

6) これら数項は、『情念論』中では魂の諸機能の説明 (§ 17～§ 29) 箇所に位置し、また、その原案が1645年10月6日付けエリザベト宛書簡(AT, IV, pp.319-322)に見られる。『情念論』とその作成の契機となった1645年代の数通のエリザベト宛書簡での情念分析との間には若干の相違もあろうが、本論では同じと見做し、両者の相違は別の機会に触れたい。

7) 現存する『人間論』は、その冒頭に述べられる3部構成（自動機械としての身体・そこから分離した魂・心身合一）の計画(AT, XI, pp.119-120)の中、その第一の部分だけである。ここでは、情念は身体の機構の一つとして分析されるに留まる（だが、『情念論』では、魂なしの自動機械として身体には思惟たる情念はあり得ない）。『人間論』に於ける諸感覚中での情念の分類については、AT, XI, pp.164-165参照。『原理』では、情念は、形や大きさ等の延長以外の諸感覚について論じられる第IV部末尾で論じられる。ここでは、その書の性格上自然学的知という認識の観点から、心身合一を前提とし、諸感覚が考察されている。第IV部第189及び190項(AT, VIII-1, pp.315-318 et AT, IX-2, pp.310-312)参照。尚、『情念論』との比較上幾つかの興味深いテーマが両作品にはあるが、紙面の都合上すべて割愛し、別の機会に触れることにする。

項目に分類されている。この分類は、「内的感覚」を身体と魂との2項目に分割し『人間論』『原理』での2項分類に1項目を追加しただけの分類ではない。例えば、『人間論』『原理』では外的感覚たる触覚に分類された「痛み « la douleur »」(AT, XI, pp.143-144; AT, VIII-1, p.318 et AT, IX-2, pp.312-313)と内的感覚に分類された「自然的欲求」とが、『情念論』では、同じ「身体に関係付けられる覚知」 (§24) に分類され、他方、前2作では内的感覚に分類されていた「情念」は後者では「魂に関係付けられる覚知」 (§25) に分類されている。「関係付ける」とは、覚知された内容の「原因 « causes »」或いは発生所在の「推定 « supposer »」である⁸⁾。この3項目分類は、覚知内容の原因或いは発生所在を基準とした分類である。

2項目分類から3項目分類の変更は、心身二元論の立場と伝統的には心臓等に存すると考えられていた情念を魂に存するとする立場 (§35) とを前提とした、〈覚知の媒介たる身体器官〉から〈覚知内容の原因・発生所在〉への基準の変更である。この基準の変更は、〈媒介たる身体器官という身体の側に基づく視点〉から〈覚知する——それと同時に、たとえ無思慮であれ熟慮の末であれ、その内容を「関係付けする」——主体(魂)の側からの視点〉への移行である。

II. 「魂にのみ関係付けられる覚知」たる情念の特殊性(1): « 結果性 »

次に、この基準の変更により独立した項目として扱われる情念たる「魂にのみ関係付けられる覚知」をデカルトがいかに捉えているかを見てみる。

Les perceptions qu'on rapporte seulement à l'âme sont celles dont on sent les *effets* comme en l'âme même, et desquelles on *ne connaît communément aucune cause prochaine* à laquelle on les puisse rapporter. (§25)

「魂にのみ関係付けられる覚知」は、すなわち、原因或いは発生所在が魂にのみ

8) « lesquelles [=deux sentiments différents] nous rapportons tellement aux sujets que nous *supposons être leurs causes* » (§23) では「関係付け」は「原因」の「推定」とされる。「la douleur, la chaleur et les autres affections que nous *sentons comme dans nos membres, et non pas comme dans les objets qui sont hors de nous* » (§24) では痛みなどの「身体変状」がそれを与えた原因ではなくその発生所在に「関係付ら」れており、更に、「la douleur est sentie comme dans le pied par l'entremise des nerfs du pied » (§33) では足の神経を介することでその所在認定すなわち「関係付け」がなされ、痛みの感覚に於いてはその痛みという内容と同時にその所在が感覚されていると解される。しかし、§24後半の2つの身体変状が同時に同じ神経を介する場合の例示では、それらの所在認定の判断(=推定)が必要とされている。従って、「関係付け」には常に判断介入の余地がある。デカルトに於ける感覚(現代の用語では *sensation* ではなく *sensation*)の問題には未だ解明すべき問題が残っているが、本論では、「関係付け」=「推定(=判断)」としておく。尚、この問題については最近では次の研究論文が有益と思われる。F. du Buzon, "Le Problème de la Sensation chez Descartes", in *Le Problème de l'Âme et du Dualisme*, Vrin, Paris, 1991, pp.85-99.

あるとされる情念は、実は、覚知の「結果」たる情念という意識状態だけが魂自体にあるのであって、後に見るように、その「最も近い原因」は、普段何一つ知られないだけで、本当は脳中の精気の特異な運動なのだ、と自然学者デカルトはここで述べている⁹⁾。因みに、デカルトは、§51で、精気の特異な運動を情念の「最後の最も近い原因 *« la dernière et plus prochaine cause »*」と呼び、その精気の運動を生起する原因を「第一原因 *« leurs premières causes »*」と呼んでいる。

たとえ精気の特異な運動を原因にもつにしる、情念という意識状態に相応する事態は魂にしかなく、その発生所在はやはり魂自体のうちにある。このことは、『情念論』の他の記述から、情念を「関係付け得る最も近い原因が通常何一つ知られない」理由——感覚神経の運動を脳室内で伝達する精気の媒介性と情念発生に関わる身体的メカニズムという2つの理由が考えられるが——を吟味すると、明らかになる。

先ず、§32・§34・§35の説明から「神経を介して魂に到来する覚知」の成立過程は次のように纏められる。感覚器官の運動が神経を介して脳室に入ると、脳の空室を満たしている精気が運動することによってそれが脳室の中心に吊るされている「小さな腺」——魂への、身体の唯一の直接的接点——に伝えられ、これにより生じる腺の運動（或いは腺上の像）が魂に働きかけてこの運動を覚知させる。神経を介する覚知は、どんな覚知であれ、脳室内で精気の運動（流れ）を媒介とする。この覚知に於いて、魂は、精気の運動が伝える伝達内容と伝達源——感覚器官の運動に相当する内容とその運動を脳まで伝える神経——を受け取るが、脳中の媒介たる精気の運動を意識することはない。例えば、「痛みが、足の神経を介することによって、足にあると感じられる」（§33）としても、脳中の精気の運動が知られることはない。精気の運動は通常意識されることのない媒介である。

次に、情念発生に関わる身体的メカニズムを見てみる。§27の定義によれば、情念は「精気の特異な運動により生起され、維持され、強化される」。この「精気の特異な運動」のメカニズムは、§36の「恐れ」の情念を例とする情念発生の説明で明示される。すなわち、幾つかの条件——外的感覚から魂に伝えられた対象の像の恐ろしさ、身体状態、魂の力強さ、過去の経験——により、脳は次の2つの神経①②に精気が流れるように按配される¹⁰⁾——①「恐れ」の対象から逃げる

9) 興味深いことに、各項の表題は別として、本文では、§23・§24で *« nous »* とされてきた主語が §25で *« on »* となる。

10) 「恐れ」の情念発生に関わる精気の流れが生じるように脳の状態（神経の孔を開くこと等）を按配する「幾つかの条件」(*« cela rend le cerveau tellement disposé ... »* §36) については、様々な問題がある。例えば、②の神経への精気の流れは自己誘発的な流れであるが、その流れの端緒はいかに生じるかという情念の、維持・強化ではなく、原初的発生の問題である。②への流れと共起する①の流れは魂の関与なく自動機械たる身体に生じ得る (§13・§16・§38) が、②についてはどうであろうか？ 列挙した諸条件の中に既に見られるように、身体的要素・魂的要素が複雑に絡み合っており、しかも、§51によれば、この精気の流れは外

肢体の運動に役立つ神経：②この同じ神経の孔を開き続けこの神経に流れこむような精気を脳に送る血液状態〔精気とは脳に到った血液の「最も激しく動き最も微細な部分」 (§ 10) である〕を按配する心臓等の諸内臓器官の運動に役立つ神経。ここで注目したいのは、②の神経への精気の流れは、心臓等を介して再び同じ②の神経への精気の流れを可能にするという自己誘発的な精気の流れである。ところで、§ 36・§ 38によれば、②の神経への精気の流れ自体が、それだけで同時に、魂と身体の接点たる「小さな腺」に特殊な運動を引き起こし、その運動が「自然の定め *« l'institution de la nature »*」により魂に情念を感じせしめる。この精気の流れの自己誘発性により情念は「維持され強化される」のであり、§ 37では、この自己誘発性こそが § 27の情念定義に見られた「精気の特異な運動」の特異性とされる。

情念は、意識されることのない媒介たる精気の自己誘発的な運動から生じる。意識されることのない精気の運動が自己誘発により自らで自らの運動を引き起こしているが故に、そこには、伝達源も伝達内容もない。従って、たとえ精気の特異な運動により生起するにしても、覚知の「結果」たる情念という意識状態の内容は、それに対応する事態を魂自身のうち以外のどこにも持たず、その発生所在は魂そのもののうちである。この点で、情念は、外的対象・身体に関係付けられる覚知とは全く異なる特異性を持つ（以下、この特異性を「結果性」と記す）。この「結果性」は、情念それ自体——例えば、「悲しみ」の対象は別として、「悲しみ」自体——には魂にとって外在的なものが全く含まれないことを意味する。

Ⅲ. 「魂にのみ関係付けられる覚知」たる情念の特異性(2)：「内在性」

情念と他の感覚との相違について、この分類の直後の § 26 (神経を介さず脳中の精気の偶然の運動により生じる諸感覚の幻影が論じられている) で、次のように述べられる。

Il faut aussi remarquer qu'il arrive quelquefois que cette peinture est si semblable à la chose qu'elle représente, qu'on peut y être trompé touchant les perceptions qui se rapportent aux objets qui sont hors de nous, ou bien celles

的感覚の対象・魂の意志・身体状態・精気の偶然の運動によっても生起され、情念の原初的発生がどこまで身体的で精神的かという重要な問題がこれまでの研究でも未解明である。しかも、この問題は、デカルトに於いては生理学に基づけられる情念統御論——当然「高邁」も含めて——を考察するためにも、必須の解明事項である。本論では、情念発生 of 身体的メカニズム全体ではなく、それに関わる——原初的ではなく、維持・強化の——身体的メカニズムに言及するに止め、前者については、別の機会に論じることにした。また、デカルトに於いては、精気の流れの方向性（腺を基準に遠心的か求心的か）の記述にズレがあるとされるが、これについては次の論文が有益である。J. -M. Beyssade, "Réflexe ou admiration: Sur les Mécanisme sensori-moteurs selon Descartes", in *La Passion de la Raison*, PUF, Paris, 1983, pp.111-130.

qui se rapportent à quelques parties de notre corps, mais qu'on ne peut pas l'être en même façon touchant les passions, d'autant qu'elles sont *si proches et si intérieures à notre âme qu'il est impossible qu'elle les sente sans qu'elles soient véritablement telles qu'elle les sent.*

情念自体は、その原因に関わらず、他の諸感覚にはない真理性を有している。外的対象・身体に関係付けられる覚知については、脳中での精気の偶然の運動から生じた像すなわち幻影によって、実際には存在しないのに存在するとの誤謬を犯し得る。他方、魂に関係付けられる覚知たる情念については、この類の誤謬はあり得ず、たとえ幻影であろうと、我々が感じるその存在とその様態ともに真である。この真理性の理由は、先に見た情念の「結果性」から明らかであろう。しかし、デカルトは、ここで、その理由として、「情念は魂にきわめて密接して内在しているから」と言っている。「結果性」故に情念それ自体には外在的な要素が皆無なことは、ここで言われる魂に於ける情念の密接性・内在性の必要条件であっても、十分条件でない。そこで、その密接性・内在性の根拠を探ってみる。

§ 27での定義によれば、情念は、「魂の覚知であり感覚であり情動である *« des perceptions, ou des sentiments, ou des émotions de l'âme »*」との3つの面をもつ。§ 28の定義説明によれば、「覚知」とは、情念が魂の能動 actions たる「意志作用 *« volontés »*」ではなく魂の受動 passions たることを表す。この面から、我々はこれまで情念を考察してきたのである。同じ § 28で、情念の「感覚」としての面は、次のように説明される。

elles [=les passions] sont reçues en l'âme en même façon que les objets des sens extérieurs, et ne sont pas autrement connues par elle.

情念と外的感覚の対象とでは、一方で、魂に於ける受容のされ方は「同じ仕方」であるが、他方で、魂による知られ方は「異なる仕方ではない」。既に見たように、外的感覚の対象も情念も精気の運動により生じた「小さな腺」の運動という「同じ仕方」で魂に受容される。以下、「異なる仕方ではない」との迂言的表現で言われる知られ方を問題とする。

既に見たように、精気の運動は、外的感覚の場合伝達内容をもつが、情念の場合は伝達内容をもたない。また、§ 47では、精気による腺上の運動が二種類に分けられて、「一方の運動は感覚器官を動かす対象を魂に表象し *« les uns représentent à l'âme les objets qui meuvent les sens »*」、情念を生起する運動たる「他方の運動は意志に圧力を加える *« les autres y [=sur la volonté] font quelque effort »*」とされる。外的感覚の対象は、その伝達内容をもつ精気の運動により生じる腺上

の運動がそれを魂に表象することで、魂に知られる。他方、情念は、その伝達内容をもたない精気の運動により生じる腺上の運動が意志に圧力を加えることで、知られると解される。だが、デカルトは、§ 17で、覚知の表象作用により表象された対象から魂が覚知を受容することを覚知・認識の常なる原則としている（« *toujours elle [=l'âme] les [=toutes les sortes de perceptions ou connaissances] reçoit des choses qui sont représentées par elles* »）。とすれば、外的対象も情念も同じ仕方で知られているのではないか？ だが、伝達内容のない精気の運動により生じる腺上の運動が何を表象するのか？ 腺上の運動が魂に加える圧力とはどのようなことか？

この疑問は、情念のもう一つの面たる「情動」の面から明らかにされる。「情動」とは、「魂のもち得るあらゆる種類の思惟の中で、これら情念ほど強く魂を動揺させ蕩揺するものはない« *de toutes les sortes de pensées qu'elle peut avoir, il n'y en a d'autres qui l'agitent et l'ébranlent si fort que font ces passions* »」（§ 28）との情念の側面を表す。ところで、魂は自らがこの上なく強く蕩揺されていることを如何なる仕方で覚知しているのでしょうか？ 「覚知」「感覚」「情動」は各々あくまでも情念の一面を表しているのもあって、「情動」自体も情念である。従って、魂は自らが蕩揺されていることを情念という仕方で覚知しているのであり、情念は、自らが蕩揺されているという仕方での魂についての魂による覚知でもある。この覚知に§ 17の原則を適用すると、自らが蕩揺されているという仕方で魂が自らを覚知している以上、表象作用の中で魂自らがそのまま自らを受け取る、従って、実質上表象対象がないという仕方の覚知と解するしかない¹¹⁾。そこから、先の迂言的表現の問題は次のように解される。このような覚知としての情念は、実質上表象対象なしに——外部感覚の対象とは同じ仕方でなく、その意味では独自の仕方ではあるが——、§ 17の原則故に表象作用によって——外部感覚の対象とは異なる仕方ではなく——、魂によって知られている。

今述べたように、情念の「情動」としての面に注目するとき、情念は自らが蕩揺されているという仕方での魂自身についての魂自体による覚知であるが故に、情念自体は、揺るがされている魂に「きわめて密接して内在している」のである。以上より、魂に於ける情念それ自体の存在とその様態は、内在的真理性を有するのである。

ところで、「神経を介して魂に到達する覚知」の3つの分類項目の中で、「魂のみ関係付けられる覚知」の場合だけは、神経を動かす対象以外の「他の原因« *d'autres causes* »」によっても引き起こされることが§ 25で言及されている。他

11) 表象なき表象作用に関して、J. -L. Marion が、情念についてではなく、情念とは異なる「魂のうちに魂自身によってのみ引き起こされる内的情動« *des émotions intérieures qui ne sont excitées en l'âme que par l'âme même* »」（§ 147）についてではあるが、論じている。J. -L. Marion, *op.cit.*, pp. 64-66.

の原因とは、§51によれば、魂の能動たる意志、身体の状態、そして、先の§26の幻影を引き起こす脳中の精気の偶然の運動である。「結果性」「内在性」の覚知たる情念自体は、神経を介する覚知の中に分類されながらも、その分類中で示唆されるこれらの特殊性故に、神経を介する覚知の枠を越えた独自の問題を孕んでいる。その問題とは、絶対に主観的な内在的真理性の問題である。

結語

確かに、「経験から明らかなように、[...]、情念は、魂と身体との密な協同のため混乱し不明になっている覚知に数えられるものである」 (§28)。また、情念は、意志に圧力をかけることにより、人によっては「魂をこの上なく嘆かわしい状態にする」 (§48)。だが、情念それ自体——情念を引き起こした「第一原因」と眼前にある世界への実践的な関与という情念の効果、当然これらは善悪という道徳的問題に関わるのであるが、これらから切り離れた魂に於ける情念の受容という事態そのもの、例えば、「悲しみ」を感じていることそれ自体——は、たとえ夢であろうと幻影であろうと、その存在・様態ともに常に真である。但し、この真理性は、原因上・実践上の関わりを括弧で括り、情念についての研究と深い省察とを経て明かされる真理性である。日常生活との関わりを括弧で括り、精気の運動・神経の構造・諸器官の機能など身体に関する自然学的知を利用して、魂が自らを自らの側から見る形而上学的態度の探究によって明かされる真理性である。『情念論』では、諸情念の分類・情念の効用・道徳的問題等の様々な情念分析が展開される以前にある情念の定義付けの段階で、このような形而上学的態度により、デカルトは情念を捉えている。これは、それ以前の——『人間論』『原理』での——情念分析からは伺えない情念への視点であると同時に、『省察』前半に見られる視点・態度であるように思われる。

(大阪大学博士課程在学)